

～『自ら考え、判断し、行動できる生徒の育成』をめざして～

生活委員会 —ルールメイキングへの挑戦—

1. 今年度の取組

昨年度は身だしなみセルフチェックを軸にした「前南 NEW スタイル」を生徒と共に作成しました。企業や大学を訪問してアドバイスをいただく中で「社会に準じる」がキーワードとなりました。そうすると社会人のマナーとなっている「化粧」を高校生でも認めるべきではないかという意見が出ました。昨年度は時間が足らなかった為、今年度の課題として議論していくことになりました。今年度も生活委員会と生徒会、そして有志のメンバーを募集して活動しました。写真とともに取り組みを紹介いたします。
(生活委員会顧問 高田 慧)

①有志メンバーの募集

生活委員と生徒会本部役員がタッグを組んで各教室を回り有志の募集を行いました。その後有志メンバー2名が加わり活動が本格的に始まりました。



②株式会社メモリード様訪問

昨年度に引き続き、株式会社メモリード様を訪問させていただきました。冠婚葬祭を取り扱う接客のプロという立場で高校生の身だしなみについてご意見をいただくことができました。身だしなみは相手を尊重し不快にさせない為に整えるものであることを考えると、高校生の化粧は誰の為の身だしなみであるのかが不明瞭ではないかというご意見が印象的でした。「おしゃれ」と「身だしなみ」は違うということ改めて学ぶ良い機会となりました。

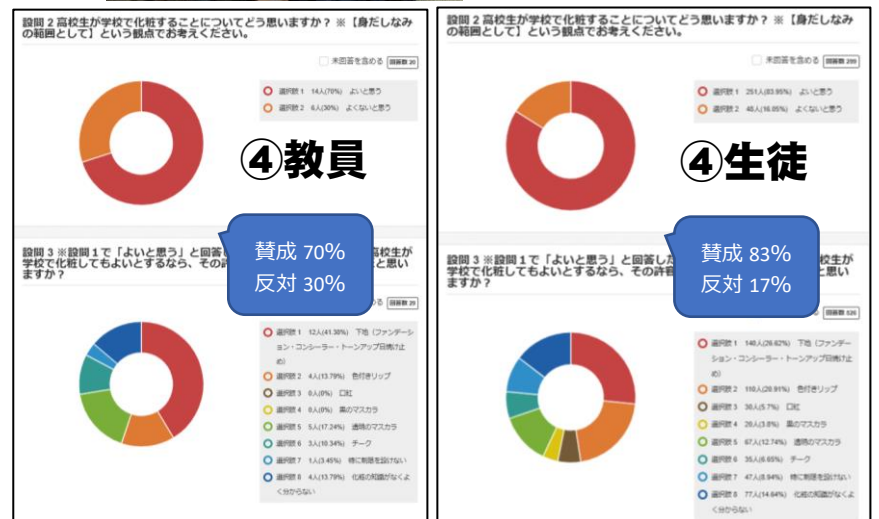


③化粧品会社へ勤務する方からのアドバイス

「スクールメイク」という言葉もあるように、プライベートでするのは違った公の場である学校で受け入れられる化粧というものがあるのか、あるとすればどのようなものなのか、そういった疑問に答えていただくことができました。実際に化粧道具を持参してくださり、女子生徒たちにはレクチャーもしてくださいました。基本的には肌をきれいに見せたり、傷やシミ、ニキビなどを隠すベースメイクだけが妥当ではないかというご助言をいただきました。また、化粧することでコンプレックスが消え明るく学校生活に臨めるようになる生徒が増えるのはメリットの一つだともおっしゃっていました。

④教員&生徒アンケート実施

教員・生徒ともに「賛成」の割合が高かったが、反対の方の意見ももっともなものが多く、慎重に判断すべきだと考えている。以下はアンケートの記述回答。



メリット

気分があがる、傷を隠せる、自分に自信が持てる、学校生活を明るく過ごせる、社会に出る練習になる、かわいくなれる など

デメリット

勉強に集中できない、トイレが汚れる、ルールを守れない人が出る、経済格差が出る、前南の品位が落ちる、化粧崩れを気にして体育に集中できない、など

ご意見

- ・トイレがすでに化粧で汚れている。まずはルールを守る実績が必要。
- ・高校生は化粧しなくても「清潔感」を出すことができる。
- ・下地くらいならOKだと思う。派手にならないルール作りができるなら。
- ・早晚化粧が解禁される雰囲気は出てくる。前南が先駆けになってもいい。などなど

⑤教員・生徒座談会



- ・前南の生徒指導が大変だった時代からの歴史がある。服装が落ち着くまで大変な時間と労力が必要だった。また、保護者や地域の方からの理解も必要。
- ・化粧を認めるにしても、どこまではOKか、化粧直しは認めるのか、違反した場合どうするのかなどのルール作りを丁寧に進める必要がある。
- ・現状のルールで化粧は禁止されているが、それを守れていない生徒がいる。ルールが守れていないのに新しいことを始めても、その人たちがルールを守れるとは思えない。何か新しいことをしたいなら、今のルールを守らせることを徹底してから提案すべき。 などなど

2. 来年度への課題

教員、生徒ともに「賛成」の票は多かったものの慎重に議論していくべきだと感じています。この問題に最適解はありません。みんなで話し合い、譲歩したり説得したりしながら生まれる落としどころ、つまり「納得解」にたどり着くことが大切なことだと思います。そのためにも、教員も生徒も意見に耳を傾け真摯に向き合う姿勢が問われます。ですから今年度は結論を出さず、来年度の継続審議課題とします。まずは座談会で出た、現状のルールを守れていない生徒たちにどうアプローチしていくかというところに向き合っていくことから始めたいと思います。

ルールメイキングには大変な労力を要します。それぞれが色々な思いを持っているからです。しかし、自分たちの学校ですから自分たちでルール作りをする、ひいては自分で管理を行う（セルフコントロールする）ことにはとても大きな価値があると思います。そしてそれは「自治」と呼ばれるものであると思います。またはそういう姿勢を「民主主義」と言い換えてもいいかもしれません。

話し合い、考え抜いた結果、「退く」（化粧は認めない）という結論に達しても全然不思議ではないと思います。しっかりと考え抜いての結論であれば、どちらに転ぼうとも称賛されるべきだと思います。「自治」の足音が聞こえてきたような気がします。来年度も生徒たちの頑張りを見守りたいと思います。（生活委員会顧問 高田 慧）

3. 生徒たちの感想

1年次の頃からこの活動に興味があって、2年次に上がってから自主的にこの活動に参加しました。実際にやってみて、自分の「校則」に対する見方が変わり、校則を見直す重要さや大変さを分かることができました。学校のことだけでなく、社会のことについてもこの活動を通して学ぶことができ、とても自分のためにもなる活動だったと思います。今回の活動では残念ながら年度内に最終目標までには至りませんでしたが、今後の学校の活動の力になれてとても満足しています。これからも諦めずにこの活動を続けて頑張ってください！（生活委員会 2-4 茂木莉子）

今回の活動で先生方と直接化粧について話し合ったり、いろんな企業の方にお話を聞いたり普段なかなか経験できないようなことが経験できてとても面白かったです。生徒同士のやりとりは何度もやってきましたが、先生方たちとの交流はとても新鮮で新しい見方や考え方、多くの気づきがありとても勉強になりました。「身だしなみは相手を思いやる気遣いである」このことばをキーワードに校則と、そして自分とこれからも向き合っていきたいです。（生徒会副会長 2-3 小此木いろは）

このような経験をするのが初めてだったので、とても不安な気持ちもありましたが、頼もしい仲間と一緒に問題を解決していきこうと頑張れたのはとても良かったです。また、実際に企業の方にお話を聞くということは、中々ないことだと思うので、いい経験になりました。今年度中に、校則を見直す、ということではできませんでしたが、有志としてこの活動に携われたことに誇りを持っていきたいと思いました。（有志 2-4 酒井翔生）

この活動を取り組んでみて、校則を見直すことの大切さを学ぶことができました。化粧について実際企業の訪ねて聞いてみたり、学校でアンケートを取ってみたりなど様々な活動ができてよかったなと思います。今回はまだ目標達成とはなりませんでした、いい経験ができたなと思います。（生活委員会 2-4 岩沼 岬）

化粧班での活動はとても難しく、常に悩み続けていました。学校で化粧をしても良いかという議題は前南だけではなく全国的にも取り上げられているものであり、多様性という面で今後も考え続けられるものだと思います。今回は結論を出すことができませんでしたが、それらを自分事として考え、悩み、自分なりの意見を持つことが出来たこの経験は決して無駄ではなく、私にとって大切なものになっています。また、この活動を行うにあたって多くの方々のご協力してくださいました。学生ではなく、大人の方からお話を聞いたことで学校で化粧をすることに対して私たちが考えている思いと対比できる部分があり、客観的に捉えることの大切さや立場が違う方の意見の価値を実感できました。感謝してもしきれません。「誰」のために化粧をするのか。化粧を身だしなみとするならばマナーの相手は「誰」なのか。とても難しいことですが、まず考えてみるものの価値を知れたからこそ、これからも考え続けていきたいです！（生徒会長 2-4 腰高紗依）

僕はこの活動に有志として参加しました。全てのことが自分にとって初めての体験で、校則の見直しという「決まっていることを変えようとする」との難しさや壁を知ることができました。年度内に目標は達成できませんでしたが、案をたくさん出して壁にぶつかってそれに対応していく経験が養えたことは非常に価値のあるものだったと思います。（有志 2-5 増田暁斗）

★教頭より★ 「高校生の化粧」というコトバひとつとっても人々の見解は異なるでしょう。「必要ない」と断言される方もいれば、「それを施すだけでコンプレックスが緩和し、顔を上げられるようになる」という方もいるはず。すなわち『答えがない』わけ。そんな問題に本校生徒は真正面から向き合い、多方面からの意見やさまざまな年齢層の方々の意見を伺い、議論しているのです。今回は「結論に達しなかったため、次年度に持ち越す」という結論を出しました。これも柔軟な考え方のひとつだと思います。ひと昔前の考え方では「実現できなかつたら失敗、無駄」という感じ方もあったかもしれませんが、今の生徒にそんな感想はありません。「結果」がすべてではないのです！化粧班のみなさんは「多様性」を考える時代の最先端の課題に取り組んでいるのです！胸を張りましょう！教頭 星野 亨

★校長より★ 「高校生の化粧」というとても難しい課題に挑戦してくれた生徒の皆さんに感謝します。単純に良い、悪いだけの問題にせず、外部の方の意見を聞いたり、アンケートをとったり、座談会を開いたり様々な方法で課題にアプローチができたのが素晴らしいと思います。このアプローチの方法は探究的な課題解決の方法と言えます。皆さんの感想にもある通り、ここまでの取組を経験したことがとても意味のあることです。結論を急ぐ必要はありません。本当に良い取組ができていくと思うので、この後も是非、丁寧な取組をしていって欲しいと思います。校長 原 拓史